

**文字がやさしくなれば、日本の科学がもっと発達するだろう
と言う人がいる。しかし、それは
「風が吹けば桶屋がもうかる」ほどの真実性をも持たない。**

「文字がやさしくなれば、そのために、国語学習の時間が浮いて、他の学科、特に、科学方面の学習を、今まで以上に進めることができる」とは、かな文字論者、ローマ字論者のよく口にする言葉です。

これに対して、国立国語研究所の水谷静夫氏は、明和35年7月号の「言語生活」で、『「文字がやさしくなれば、人間は怠けるものだ」ということを、十分に考え入れなければならない」と言っています。「文字がやさしくなれば……」という言葉は、東京大学の服部四郎教授が、国語学会創立十周年記念討論会「漢字制限の問題点」の席上で発言したものであり、水谷氏はこれを引用して警告したわけです。なお、参考までに、その時の服部教授の発言の要旨を紹介しますと、氏が当用漢字制定当時は、国語審議会の一員であったので、責任を感じている、と断って、それから次のように述べているのです。「ある点で、私は**誤謬をおかしておった**ということでございます。それは、実はアメリカへ行きまして気が付いたのでございますが、それまで私は、ただ、字がやさしくなれば、それだけ負担が軽くなって、学習の時間が他の方の学科に振り向けることができる、学習の時間を取れる、そう簡単に考えておりましたが、実は人間は、字がやさしくなると、怠けるものだということに気が付いたわけでありませう。」

「文字がやさしくなれば、そのために、国語学習の時間が浮く」という考えは、まったく机上の空論で、私のように、実際に指導して、少しでも考えてみれば、誰でもすぐその誤りであることはわかります。しかし、そうかと言って私は、「文字がやさしくなれば、人間は怠けるものだ」と考えて、文字学習のやさしくなるのを避けるというのであるならば、それにもとても賛成できません。

ただ私は、かなやローマ字が「やさしい」文字であるかどうかは別として、「文字が『かな』や『ローマ字』になれば、人間の思考力が退歩するだろう」ということは、かなりの自信を持って、言うことができます。

「文字がやさしくなれば、人間は怠けやすい」という事実は確かにあり得ることでしょう。しかし、怠けない人間を作るためには、文字をむずかしくする必要があり、というわけのものではないと思います。人間を勤勉なものにするためには、どうしても文字をむずかしくするより外に解決の方法がない、というほどのものではありません。文字がやさしくなるとほんとは時間が浮くものであるなら、そしてそのため怠けそうになったら、その時には、怠けさせないための解決策が何かしら考えられるはずで、他に別に考えるべきです。ですから、私は、「やさしい文字」について、水谷氏や服部教授のような心配はしていません。しかし、「文字の幼稚さのために、人間の頭が弱くなる」ということには、私はより本質的な因果関係があると考えていますので、この点については、注意する必要があると思っています。

次に、「文字がやさしくなれば、学習の時間が浮く」ということの本質

について、考えてみたいと思います。

表音主義者は、「かな文字を学べば、それだけで、どんな国文でも読んだり書いたりすることができる」と考えているようです。そういう単純な考えだからこそ、「国語の表記をかな文字(ローマ字論者はローマ字)にしたら、国語学習が容易になって、時間が浮く」というようなことが本気で言えるのでしょう。これがもしも真実であるならば、「ローマ字26字を学べば、それだけで、英文でもフランス文でも、自由に読んだり書いたりすることができる」はずですし、また、「イギリスやフランスの国語学習の時間は、日本の十分の一にも足りたい時間で済ませられる」はずです。(漢字は、当用漢字だけで1,800余、ローマ字の70倍以上あります。)ところが、事實は、「ローマ字26字の習得は、英文やフランス文の読み書きに対して、何の力にもなりません」し、「イギリスやフランスの国語学習の時間は、わが国の二倍以上もある」のです。「表音文字にすれば、国語学習の時間が少くて済む」とは、こんな嘘がよくも思い切って言えたものです。外国の事実を少しも知らないで、自分勝手な想像をもっともらしく言い立てるばかりか、それを**証拠**にまででっち上げて、無実の罪を漢字に着せ、漢字をこの世から消してしまおうというのですから、実に恐ろしい考えの人たちではありませんか。こういうでたらめを言っても、罪の意識を持たないばかりか、世のため、人のためにしているのだ、と信じているのだから大変です。こういう、事実に対して目を向けようとしないで、精神主義だけで、無理やりに人を自説に引っぱり込もうとする人たちは、いわば、葦原将

軍みたいな誇大妄想狂に近い人たちであって、これらの人を説得させることは不可能だと思います。要は、こういう人の言うことを、肩書きだけで信用せず、自分の目で事実を見、自分の頭で考えることです。

およそ、国語学習にかぎらず、何の学習でも、言葉の理解が、最も基礎的なものだと考えられています。その言葉の理解は、前の章で指摘しましたように、かな表記の場合より、漢字表記の場合の方が、はるかにやさしく、しかも正確精密にできるのです。その上、かな(ローマ字も同様)文字には、国語表記上に致命的な欠陥があるのです。それは、国語の音韻が、外国と比較して、非常に少ないのに、音韻のはるかに多い中国の言葉を取り入れたため、「同音異語」が、外国とは比較にならぬほど多くできてしまったことです。この多い「同音異語」をかなで表記するとしたら、まったく同じ表記になってしまって、その意味を正しく読み取ることは、不便というよりもほとんど不可能に思われます。勿論、意味は文脈からある程度察知できますが、わが国では、「帰納文法と機能文法」「公爵と侯爵」のように文脈からでは区別できない言葉があまりにも多いのです。また、「言いかえ」ということもよく言われますが、これで解決できるものもありますが、これにすべてを託すことは無理です。そういう無理をあえてしなければ、漢字を追放したくてもできないのですから、表音主義にとりつかれている人はともかく、一般の人までが、不都合を感じていない漢字を追放するために、無理をするということはあまりにも非常識なことと言わなければ

なりません。

常識の「常」は、字音かなづかいでは「ジャウ」と記されましたが 同じ[zyô]と発音されるものには、乗馬の「乗」(ジョウ)、擾乱の「擾」(ゼウ)、場外の「場」(チャウ)、醸造の「醸」(ヂョウ)、条件の「条」(デウ)、一帖の「帖」(デフ)等七種類の表記があつて、同音異語の混乱を少しでも防ごうとしていたのです。漢字を使わないで漢語を表記するためには、このくらいのかなづかいは最少限必要ですが、それでも、上下の「上」、状態の「状」、城郭の「城」、感情の「情」、清浄の「浄」、土壌の「壤」等、「ジャウ」と表記されるものが、実に数多く存在するのであつて、これでも決して十分とは言えません(この字音かなづかいは、大変な非難をあびていますが、漢字に頼らないで表記しようとするならば、このくらいの使いわけができなくては、かなは実際の役に立ちません。しかし、漢字を使用する以上は、この字音かなづかいはまったく不必要となります。この点、漢字も、字音かなづかいもともに学習させようとするは無用な行き過ぎですし、漢字も止め、字音かなづかいも止めようとする便宜主義的なやり方も行き過ぎだと言わざるを得ません)。

漢字によって、これらの同音異語を学習し、理解してしまっている私たちは、これらの同音異語がかな書きされて提出されても、注意して読めば誤解を少なくすることができます。しかし、だから、漢字を廃止してかな書きだけにしてよいと考えたら、それは大違いです。それは、かな文字の陰に、内部言語として、漢字の裏づけがあり、それを

拠り所として理解が行われているからです。それが証拠に、かな書き文を読む時には、常にこれを頭の中で漢字に置き換えて読んでいるはずで、例えば、「これは『機能』かな、『帰納』かな」と、そのかなに、知っている漢字を一つ一つ思い出しては、当てはめているはずで、ですから、事実上、かなを読んでいるのではなく、かなによって想起される漢字を読んでいるのです。つまり、頭の中の漢字を読んでいるのです。この意味で、私は機械の利用という点で、カタカナやローマ字タイプライターを利用することは少しもさしつかえないと思っています。日本語の特性からして、かな文字による語形のゲシュタルトを作ることは無理です。それよりも、漢字を内部言語としてのかな表記をねらう方が賢明だと思います。例えば、同じ「こうせん」という表記が、「光(光線)」になったり、「水(鉱泉)」になったり、また「こうざん」が「高山」になったり、「金銀を掘り出す山(鉱山)」になったりするのを、どうして学習させ、理解させるというのでしょうか。私は、前章で、「さくぶん」「ぶんしゅう」という表記では、言葉の理解がなかなかむずかしいが、「作文」「文集」では、教師の指導がなくても、子供たちが独力で理解する、という事実を紹介しました。私は、さらによい実例を、次の章で紹介したいと思っています。